

# 子どもの本の森をさまよう

さくま ゆみこ

私は二年以上前から長野県の本曾に住んでいる。ひよんなことから、知り合いもいなければ名前を聞いたことさえなかった本曾山中の旧中山道沿いの小さな村にやってきて、そのまま住んでいるのである。この間世の中はコロナ禍に見舞われ、講演、会議、打ち合わせなどはほぼすべてオンライン開催となったので仕事もそのまま続けている。住んでいるのは空き家バンクで見つけた小さな古家。すぐ裏は森である。

さてその森だが、本曾の森は山の森である。ヨーロッパでは平地の森を歩き回ったこともあるが、日本は細長い島国であり海までの高低差がかなりあるので、たいていが山の森なのではないだろうか。

本曾といえばヒノキが有名で、林業がすたれてしまった今でもヒノキはあちこちに植わっているが、すぐ裏の山には竹や広葉樹もある。そしてこのあたりの森にはクマ、サル、フクロウ、イノシシ、ヘビ、キツネ、ハクビシン、シ

カなどさまざまな者が住んでいる。犬の散歩をしていてサルの家族に出くわすこともあるし、獣の強い匂いがしてくることもある。夕暮れの森でホーホーとフクロウが鳴いたり、夏だとヒグラシが何十匹とうるさくわめいているのを聞くと、ふっともう一つ別の世界にいざなわれているような気もしてくる。

ここでは、日本で出版されている絵本や児童文学の中から、私が好きな作品やすぐれていると思う作品を例に挙げて、「森」がどんな場として描かれているかを考えてみたい。

## 得体の知れないものがある場としての森

森に入ると、声や音がしなくても何かがあるという気配を感じることもある。『もりはみている』（天竹英洋文・写真、二〇二二、福音館書店）は、ごく小さい人向けにそんな森の気配を紹介した写真絵本。北米のノースウッズの森を舞台に、感覚の鈍い人間の方では気づかなくても、森の住